

---

# ひだりて、くすりゆび (FA/RE/g)

小谷野めぐみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ひだりて、くすりゆび（FA/RE/g）

### 【Nコード】

N0544N

### 【作者名】

小谷野めぐみ

### 【あらすじ】

ロイエド／女体化／パラレル

薄汚れた背囊が一つ。長い遠出から戻ってきた従兄の荷物はそれだけだった。

「ロイ君、他の荷物はないの？」

どうやら彼の軽装に疑問を感じたのはエドワードだけではないようで、一緒に客間までついてきた母も窓を開けたり上着をかけるハンガーを出したりと忙しそうに動き回りながら訊ねる。

当然だ。戦地に赴く軍人ともなれば、いくら地位が高くとも必ず必須で携帯する一式があるのだから。

「これしか残っていないくて」

けれど彼の言葉に、それ以上を言わせる必要はなかった。詳しくは聞けないし、彼も話さないだろうが、文字通り最前線で戦った軍人の暮らしはひどいものだったのだろう。

「なにか着替えを貸してもらえますか。いい加減さっぱりしたいんです」

母子の気まずさを砕くように従兄は薄汚れた軍服を摘んだ。

軍人という職業柄も本人自身も身だしなみに気を使う従兄とは思えぬほど汚れてくたびれた青の布地。体にまとう匂いはかつての心地よいコロンではなく、汗と埃が混じるきついもの。

「じゃあ早いけどお風呂を使ったら？今着ている服、今夜のうちに洗濯しておくわ…なにか着替えも必要ね」

まだパジャマには早い時間だもの。夕暮れのオレンジ色が差し込む窓を見ながら母はひとりごち、小走りに客間を出ていった。きつと父の着替えから適当なものを見つけてくるのだろう。

けれど取り残されたエドワードはどうすればいいというのか。母から持たされたハンガーを手持ち無沙汰に弄っていると、

「エドワード」

ふいに名前を呼ばれる。

「…なに？」

普通に返答しようと思っても声は奇妙に上擦った。今まで泣いていたせいもあるけれど、二人きりになるとどうしていいのかわからない。名前を呼ばれるだけで勝手に顔は赤らんだ。

「ハンガーを貸してくれないか？」

「あ、うん…」

慌ててハンガーを差し出すと、従兄は壁のフックにハンガーをかけて丁寧に上着を吊るした。

記憶にある限りいつも身綺麗にしている従兄の上着はよく見れば皺くちやで、ところどころうつすらと染みも見える。泥水や、それ以外の、多分平穏な日常では派生しない汚れにまみれてきたのだと、今更ながらに現実を突きつけられた気がした。

エドワードが平穏に暮らすこの国と北の隣国との戦争が始まって一年が経つ。開戦からちょうど一年となる日に戦争が終結し、両国の間に協定が結ばれることになったとラジオが知らせてからは十日戦地から続々と兵士が帰還しているとラジオは告げるけれど、軍人管理局へ電話で問い合わせても所在が掴めない従兄を心配していた矢先、彼はふらりと家の前に現れた。

皺くちやの軍服に無精ひげ。いつもの彼ならありえない薄汚れた姿で。

一旦中央に帰還し、帰還者登録を済ませたその足でこの東部までやってきたのだという。名前と階級を口にすれば列車の中で一番いい席を確保できただろうに、同じく東へ帰る一般兵士に混じって、貨物列車に乗って。

焰の錬金術師、ロイ・マスタング大佐。

エドワードの十四歳年上の従兄は軍人で、そのうえ優秀な国家錬金術師だ。特殊な手袋を嵌めて指先を擦り合わせるだけで焰を生み、その火で人を殺す。表では国家錬金術師として崇められ、裏では人間兵器、軍の狗と蔑まれる。地位と金の代償に侮蔑を背負う人。

だから同年代の軍人より格段に地位が高い。肩に縫い付けられた階

級章の金色、四本線に三つ星は彼が軍人になった直後の戦争で功績を挙げた褒美。二十代でこの肩書きを持つ軍人は国中で彼一人きりだというのに、今度の戦争で功績を挙げらさらに上へ昇進する可能性もあるだろうと大人たちは興奮気味に噂していた。

大佐になつて三年。今回の戦争以外でも従兄は様々な仕事で成果をあげているから、決して夢物語ではない。いくらなんでも二十代の将官というのは若すぎると反発も出るだろうが、もし彼が特に目をかけてくれる中将の令嬢と結婚をすれば話は簡単だ、とも。

「すまないね、こんな汚い格好で」

くたびれた軍服を見つめるエドワードの視線をどう受け止めたのだろう。従兄はどこか困ったように笑い、皺が残る裾を丁寧に手で延ばした。

「びつくりしたろう？」

「…うん」

確かに。台所でお茶を飲みながらふと見上げた庭先。ハーブ畑の向こうに立ちつくす軍人の姿を、最初は幻覚とさえ思った。

けれど庭に飛び出て向き合った彼は懐かしい従兄で、ただいま、と覚えのある優しい声が言った瞬間、驚きと嬉しさに涙が溢れて止まらなくて。しっかり者の弟がいつまでも泣き止まないエドワードと母をなだめ、早く従兄をくつろがせようと言わなければ日が暮れるまで庭先で泣き続けていたかもしれない。

嗚咽は止んでもまだ目元は濡れていて、子供みたいに泣きじゃくった顔を見られたと思うと恥ずかしかった。

「でも、元気そうで良かった」

この田舎の村でも出兵した家族を失った家がある。命はあっても手足を失いこれからどうやって生活するのか先が見えない家もある。間近にそういった現状を見てきた中で、いくら薄汚れているといつても手足も無事についている従兄を見ると、これまで長い間胸の中に抱えていた不安の塊が一気に崩壊して、涙として溢れてくるのだ。

「ほんと、よかつた…」

声の最後には嗚咽が混じった。子供みたいに服の袖で拭ってもぼろぼろと落ちる涙。

大好きな人が帰ってきた。無事な姿で。この一年ひたすら彼の無事を祈り続けてきたエドワードにとってそれは奇跡にも似た喜びで。

「エド」

俯いて涙が流れるままにまかせていれば、大きな手が伸びて頬を優しく包まれた。

「いつも君のことを考えていたよ」

たくましい腕がゆるく肩を抱く。彼が戦場へ旅立つ前の晩抱きしめられた時の、甘く透明な香水の匂いとは違う、汗と埃にまみれた男の匂いだった。

「君が元気にしているか、今日はなにをしているか、そんなことばかり考えて」

けれどそれがこの人の生きている証だと思えばどうしようもなく嬉しい。エドワードは黙って体を押し付け、シャツの胸元に顔を擦りつける。

「だから、生きて帰ってこれたんだ」

結婚してくれ、と告げられたのは去年の今日。開戦から十日が経ち、軍隊の第二陣が前線へと出発する前の晩だった。

地位も金もあつて、上流階級の綺麗な女性たちからの誘いが引きもきらないという年上の従兄が、ちょうど半分年下の田舎暮らしの子供で、男みたいな自分に求婚するなんて冗談だと思った。

けれど彼は本気で、エドワードの左手をまるで貴婦人にするようにうやうやしく持ち上げて、この家に来る度エドワード用のお土産にしていた、指輪を模造したキャンディを小指に嵌めた。

まだ本当に幼かったエドワードのままごと遊びを手伝ってくれた時のように。けれど、哀れなほど切実な表情で。

『必ず帰ってくる』

だから、帰ってきたら結婚しよう。本物の指輪を買おう。

彼は何度も繰り返して、エドワードはただ頷いて、その日はじめて

くちびる同士のキスをした。

野ばらの茂みに隠れて交わされたキスと約束はまだ二人だけの秘密だ。

それから何時間もしないうちに夜は明け、ロイは戦場へと旅立ち、エドワードはキャンディを食べきった。残った陶器の台座を鎖に通して首にかけて、毎日彼の無事を願いつづけた。

親類の間で期待の星と呼ばれるロイが、約束されている上への階段を放棄するといえきつと伯父たちは怒るだろう。ましてそれが親類の中でも代わり種のホーエンハイムの娘で、ちっとも女の子らしくないエドワードだと知ればなんといわれるだろうか。

親類だけではすまない。上流階級や軍、ロイが所属する世界に十五歳の女の子の居場所はない。

けれど、それでもいいのだ。

この強い大人が帰ってきたいと願う場所は自分、エドワードという存在なのだから。

きっと彼が軍人でなくとも、自分が子供でなくとも、必ず魅かれあうようにできていた存在なのだから。

「ロイ」

存在を確かめるように名前を呼び、腕で精一杯男の背中を抱きしめる。名前を呼べば、自分の背中も痛いほどにきつく抱きしめられた安堵のせいか大人の体はずるりと崩れて、床に膝をついた。今度は逆にエドワードの腹へ大人が顔を押し付ける。

「エド…」

名前を呼び返してくる彼の声は掠れ、震えていた。疲れてきているのだろう。何千何万を殺したこの人は。

「ロイ」

だから名前を呼ぶ。手を伸ばして、乱れた黒髪を優しく撫でる。泣けばいい。今まで我慢してきた全てを自分にぶちまければいい。辛いことも苦しいことも、全部自分に向ければいい。全部、なにかも受け止めて包み込んであげるから。

「おかえり、ロイ」

腰にすぎる手をやんわりとほどき、目の前に運んだ。骨ばった男らしい手はかさつき、指先はかわいそうなほどにひび割れていた。殺戮の手、と人は言う。

けれど今エドワードの背中を包み込むのはどうしようもないほど優しく、どうしようもないほど弱くて、自分にすぎりつく哀れな恋人の手だ。

ロイ＝マスタングはもう、自分がいなければ生きていけないのだ。そう考えればすぎりつく大人はどうしようもなく愛しくて、エドワードはすっかり自分のものになった男が二度と自分の元を離れることがないよう、骨ばった手の、くすり指へとくちびるを落とした。高価な指輪など買わずとも、二人が未来を誓うにはそれで充分だった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0544n/>

---

ひだりて、くすりゆび（FA/RE/g）

2010年10月8日13時45分発行